

NewsLetter

自治医科大学地域医療オープンラボ



Vol.67, Mar, 2013

Shrinking World における僻地での臨床研究

内科学講座（循環器内科学部門）
American Society of Hypertension Comprehensive Hypertension Center
Section of Endocrinology, Diabetes and Metabolism
Department of Medicine, University of Chicago Medicine

矢野 裕一郎（宮崎県 25 期）

宮崎県 25 期卒業の矢野裕一郎と申します。このような大変貴重な機会を与えていただき、深く御礼申し上げます。私には皆様に紹介できるような特筆できる研究はありませんが、本稿ではこれまで約 8 年間継続して参りました臨床研究について、お世話になりました方々への感謝の意も込めて執筆させていただきます。



医師 3 年目で地域医療へ

2 年間の初期臨床研修を終えたのち、西郷村という小さな村へ赴任させていただいた。学生の頃からの恩師である自治医大循環器内科の島田和幸先生（現：小山市市民病院長）と苅尾七臣先生の影響もあって高血圧に興味があった。“地域に出たら高血圧の研究をしよう！”と意気込んでいた矢先、町立病院の院長先生に“否”と断れた。臨床研究における最大の喜びは、得られた結果を患者さんに還元したとき、逆に“ありがとう”と言ってもらえることである。少なくとも高血圧の臨床研究ではそれが可能である。ただ、物事には順序があったのである。その重要性を知った。その後、地域住民と馴染んでいくにつれ、院長先生にもある程度認められるようになり、最終的には一つの臨床研究をやり遂げることができた¹⁾。初めて出会ったときから今もなお、この町立病院の院長先生を尊敬している。その後の宮崎を母体にした臨床研究での強力なサポーターのおひとりである。本研究ではもう一つ重要なことを学んだ。“臨床研究を自分一人でやるのは時間もかかるし、寂しい(?) から、同じ環境にいる友達と一緒に楽しくやろう！”そう思い、自治医大 25 期卒業生数名で力を合わせて遂行した。臨床研究における私一人の力など微々たるものである。医療現場同様、チームワークが重要であり、充実した時間を共に共有できる喜びを心底実感した。

環境の異なる診療所勤務が新たな研究の視点へ

地域医療勤務の中で、山に囲まれた診療所と海に面した診療所の二つに勤務させていただいた。非科学的な表現だが、患者さんの性格や生活環境、家族の反応など結構な地域差があり、“まあ、いろんな人生があるな”と感じては自分の人生などを時折想像したりもした。その中で、常々、“高血圧に関連した臓器障害にも地域差があるのでは？”と感じていた。これを統計手法を用いて、幾分科学的に証明し、論文という形に残した²⁾。要約すれば、「海岸部の住民の方が山間部住民に比べ頸動脈の動脈硬化や心臓肥大の進展が少なく、特に心臓肥大の方に長鎖n3 多価不飽和脂肪酸 (EPA、DHA) の摂取の違いが関連している可能性がある」という内容である。この知見自体は、特に目新しいものではないが、現在の私の研究視点に大きな影響を及ぼす結果となった。

宮崎大学での体験、そして日本人への関心

義務年限最後の 2 年間は宮崎大学地域医療学講座で過ごした。大学にはいろんな視点を持った先生がおられ、楽しい時を過ごさせていただいた。宮崎大学の浅田祐士郎先生には、剖検例における全身血管の動脈硬化の関連性を検討する壮絶な労力を要する研究に参加させていただいた³⁾。また、藤元昭一先生には、数十万の日本

全国のデータを用いて糖尿病や慢性腎臓病の危険因子を解析するチャンスを与えていただいた⁴⁾。さらに、自治医大の石川鎮清先生をはじめ、JMSコホートという偉業に関わられた諸先生方の温かい支援により、日本人糖尿病の予後について検討する機会をいただいた⁶⁾。いずれの知見も、欧米人のデータとは異なるものであったことから、“日本人の特徴”をさらに明らかにしてみたいと思うに至った。

シカゴ大学への留学

2012年10月より、University of Chicago Medicine の American Society of Hypertension Comprehensive Hypertension Center, Section of Endocrinology, Diabetes and Metabolism, Department of Medicine へ留学研究する機会をいただいた。多くの国際的トライアルに参加されている George L. Bakris 先生のもとへ留学し、高血圧や糖尿病、慢性腎臓病における国際比較を行うことで、“日本人の特徴”をさらに明らかにしたいと考えた。ところが現実はそう甘くなかった。詳細は割愛させていただくが、人生の予想は（私の場合には）大体は外れる。これはひとえに自分の調査不足のせいでもある。逆に、チャンスもまた思いもよらないところから到来するのかもしれない。Bakris 先生は大変よく私を指導してくれる良き mentor であり、個人的に大好きである。しかし、自分の目的を果たすためには、それだけでは幾分不十分であった。現在、その解決策を見出すべく、いくつかの大学とのコラボを試みている。これもまた良き体験である。すべてをお膳立てしていたならば、このような貴重な経験もできなかったと思う。最終的に結果が出せるかどうかは予測不可能である。ただ、勇気をもって挑戦していきたい。

最後に

“History” という学問の中で、私たちが生きている時代を1ページに集約できるとすれば、その見出しは“Shrinking World”になるのだろうか。留学してみて改めて実感する。私の興味である“民族差”とは、現在の（疫学）臨床研究の流行であり、そういう時代の流れを反映したものである。もう一つ強く感じるのは、今世界は“超高齢化”への対応策を躍起になって模索している。そのような現状の中で、私たち自治医大卒業生はたとえ僻地にいても、そこから世界へ発信できるメッセージが必ずある。Shrinking World なのだ。真意をついていけば世界に受け入れられるチャンスはある。そのような卒業生が一人でも多く世に出ることを切に願い、私も現在の活動を通して微力ながら役立っていきたいと思う。

- 1) Am J Hypertens 2007;20:565-72.
- 2) Am J Hypertens 2011;24:437-43.
- 3) Atherosclerosis 2012;225:359-62.
- 4) Kidney Int 2012;81:293-9.
- 5) Diabetes Care 2012;35:1310-5.
- 6) Diabetes Care 2012; PMID: 23250802.

！！地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集！！

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

【発行】自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープン・ラボ運営委員会
事務局 学事課大学院係 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7477/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>